

#### (4) 憲政軍の分裂

##### 首都争奪戦

当時、列車用の燃料炭はカランサが支配するコアウイラの炭鉱で掘られていた。カランサはビヤがメキシコ市へ入るのをあくまで阻止しようと、北部師団への石炭の供給を止めた。石炭はアメリカから買う事は出来た、しかしウイルソン大統領は、ベラクルース占領直後、メキシコ向けの武器や物資の輸出を再び禁止していた。ビヤは窮地に陥った。ビヤにとって信じられなかったのは、ウイルソンが禁輸を一部解除し、カランサの支配地であるタンピコ港揚げだけを容認したことであった。国境越えの輸出は依然禁止されたままであり、ビヤは懸命にウイルソンに嘆願したが、聞き入れられなかった。ビヤはメキシコ市への進軍を思い止まった。この時のウイルソンの行為については、今でも歴史家の間で論じられている。<sup>1</sup>

革命軍が首都へ迫り、身の危険を感じたウエルタは7月15日、最高裁首席判事フランシスコ・カルバハルを臨時大統領に任命し、メキシコを逃れた。カルバハルは1911年エルパソにおいてマデロとディアスの和平交渉にあたった一人であった。今回、彼は革命軍内部の分裂を最大限に利用しようとしてカランサと交渉した。ウエルタが解散させたマデロ議会を再度召集し、最高指揮官との間で和議を結ばせようとした。しかし、カランサはこれをきっぱりと拒否し、連邦軍の無条件降伏を求めた。その数日後、連邦軍司令官レフヒオ・ベラスコはカランサの配下に入ることを提言し、もし受け入れられなければ首都に近いサバタ軍をメキシコ市の警備に当たらせると付け加えた。<sup>2</sup>

首都では連邦軍が北部師団に編入されるとの噂が広まっていた。確かにカルバハルはビヤへも使節を送っていた。連邦軍は首都に集中し、北部師団は六七百マイル北にいて、その間にカランサ軍がいたため、ロジスティック上の問題が大きかった。アンヘレスは、ウエルタと手を結べばカランサや他の革命指導者たちから裏切り者呼ばわりをされる恐れがあると反対した。ビヤは自分がやらないとカランサが連邦軍と手を結ぶことを恐れた。こうして一度は連邦軍の受け入れに傾いていたビヤは、アンヘレスに説得されて断念した。ビヤの危惧は的中した。ビヤが断った数日後、オブレゴンがテオロユカンで連邦軍指揮官との契約に署名した。連邦軍は武器をカランサ軍に移管し、オブレゴン部隊がメキシコ市に凱旋する8月15日まで、メキシコ市の防衛に当たった。<sup>3</sup>

ビヤはカランサと決別してから、マイトレナにソノラを支配するよう公然と支援をはじめた。カランサが二千のマイトレナ軍を制圧するため、自らの軍隊をソノラに派遣しようとしたとき、ビヤはもしそのような事が起これば、北部師団をもって阻止すると言明したため、カランサは引き下がった。ヤキ・インディアンから援軍を受けたマイトレナの二千と、カランサに忠誠を誓うプルタルコ・エリアス・カイェス及びベンハミン・イルの同じ

二千の軍が衝突し、これがメキシコ革命の最大関心事となった。カランサ軍は追われ、アメリカ国境沿いの町に逃げた。カランサ派にとってソノラはオブレゴンの本拠地であり、重要な州で、殆どの兵士はソノラ出身であった。ソノラの状況を受け、カランサの指揮官たちがビヤとの会談を申し入れた。<sup>4</sup>

6月の半ば過ぎ、カランサに近い北東師団ジェネラルがビヤとの会談を提案した。ビヤはこれを了承し、それぞれの側から四名ずつ八名の会議が7月5日トレオンで開催されることになった。この会議において両軍のジェネラルは、ビヤとカランサの当面の問題と、長期的な課題である革命政権について合意し、署名を交わした。短期的にはビヤはカランサを最高司令官と認めること、見返りとしてビヤには北部師団長として自由に作戦を展開できるようにし、石炭と弾薬の供給をすることで合意した。更に一度連邦軍が降伏したら、最高司令官は会議を召集し、兵千人に一人の割合で参加者を送り込むこととした。明らかに彼らはカランサを革命軍の下に置き、軍事指導者はメキシコ大統領には成れないことに同意した。更に臨時大統領は直ちに選挙を実施することとした。彼らが採択したトレオン宣言は、連邦軍の完全排除、民主政権の確立、ウエルタに加担したカトリック僧侶への処罰、土地の分配、労働者の保護であった。しかし、ビヤもカランサもこの共同宣言を無視した。

5

ソノラ州知事マイトレナはグアイマスにいた連邦軍を包囲すると見せかけ、内密に降伏を認めて、彼らを支配下に置いた。マイトレナはカランサ派に属するソノラ軍を北部国境地帯に追いやり、事実上州全体を制覇した。遠征軍を率いて地元ソノラを遠く離れていたオブレゴンは窮地に陥った。それを打開するため、暴挙ともいえる行動に出た。僅か二十の兵を連れてビヤに会うためチワワ市に向かった。ビヤは彼を暖かく迎え、自宅に招いて、彼のいる前で電文を書き、マイトレナにカランサ軍に対する敵対行為を止めるよう打電した。その五日後、ビヤはそれとは全く逆の内容で私的な電文を発信した。先に送った電報は特別な状況下で打電したもので、無視するようにと告げた。ビヤは無条件でマイトレナを支援することを約束し、力を合わせて共通の敵と戦うことを誓った。そしてオブレゴンからマイトレナとの談合に同行を求められているけれども、自分は断ると付け加えた。

ビヤがマイトレナを支援し、オブレゴンに同行しないと打電した次の日、ビヤはソノラ問題に対する態度をがらりと変えた。心変わりの原因はオブレゴンの提案にあった。カランサをメキシコ大統領に選出しないというビヤの提案にオブレゴンは同意した。ビヤはオブレゴンに同行してマイトレナに会いに行った。マイトレナはビヤの真意を測り兼ね、戸惑ったが、結局二人に押されて同意書に署名した。オブレゴンが最高指揮官となり、マイトレナを全ソノラ軍の指揮官に任命した。ソノラで戦っている当事者にとり、受け入れられない内容であった。この同意書が破棄されるまでに二十四時間もかからなかった。<sup>6</sup>

オブレゴンとの合意を得るのに、マイトレナは邪魔だとビヤは感じた。ビヤがマイトレナを犠牲にする見返りに、オブレゴンはカランサを見限ることになった。9月3日、二人

はマイトレナに無断で、中立的な立場を通していたフアン・カブラルをソノラ知事に据えることを決めた。その時点でカイェスとイルをチワワのカサス・グランデスに移すことにした。ビヤはマイトレナを、オブレゴンはカランサを、其々犠牲にすることで合意し、オブレゴンはメキシコ市へと帰っていった。

カランサは二人の司令官、ビヤとオブレゴンに手紙を書き、要求をきっぱりと断った。ソノラでも双方が激しく反対した。ビヤにとって最も重要な、カランサを大統領候補にしないと言う約束を果たせなかったにもかかわらず、オブレゴンは再度チワワに現れ、カブラルを知事に据えることを求めた。それに対する見返りは何もなかった。ビヤは初めて騙されたと気付いた。事実オブレゴンの目的は、表向きとは全く異なったもので、ビヤ配下のジェネラルや兵士に対し、ビヤの影響力を削ぎ、自分を売り込むことが目的であった。7

猜疑心を募らせたビヤはオブレゴンと歴史に残る劇的な対決をした。オブレゴンがラウル・マデロと食事をしているときビヤに急遽呼び出された。ビヤは狂暴な怒りを顔にしてソノラからイルを直ちに撤退させることをオブレゴンに要求し、更に自分を欺いたと激しく責め、何時でもオブレゴンを処刑できるよう銃殺隊を呼んだ。アンヘレスとビヤの妻ルス・コラルの懸命な説得により落ち着きを取り戻したビヤは、暫くして銃殺隊を解散し、オブレゴンをメキシコ市へ返すための列車を手配した。その夜二人は夕食を共にしたが、前もって予定されていた舞踏会にビヤは参加しなかった。8

オブレゴンはメキシコ市向けの列車に乗ることを許された。彼はとりあえず新たな戦争を回避したこと、ビヤとカランサを同時に権力の座から降ろすこと、ビヤのジェネラルと密約を交わしたことで満足していた。カランサはオブレゴンの本当の狙いを知っていたと思われる。それ以上にビヤはオブレゴンの真意を見抜いていた。カランサはオブレゴンの帰りを待って、チワワで何が起こったかを確認することなく、サカテカスとアグアスカリエンテス間の交通妨害を企てた。サカテカスはビヤ軍、アグアスカリエンテスにはカランサ軍部隊がいた。カランサはジェネラル・ナテラに両市を結ぶ鉄道線路の切断を命じた。9

これはカランサが行った、これまでで最もあからさまな北部師団への敵対行為であった。これはビヤが南下して南部や中部地帯で軍事作戦を展開することへの彼の恐れを表していた。カランサは同時にビヤに対し、オブレゴンへの攻撃を挑発する狙いがあった。カランサはオブレゴンへの不信感を徐々に募らせていたからである。これを受けてビヤは、マニフェストを発表し、その中でカランサを最高指揮官と認めないことを明らかにした。

ビヤとカランサが分裂したことでオブレゴンは再び生命の危険に曝されることになった。ビヤはオブレゴンに乗せてメキシコ市へ向かっていた列車を引き返すよう命じた。オブレゴンは再びビヤの家に連行され、処刑すると脅された。オブレゴンの処遇に関して北部師団のジェネラルは真っ二つに割れた。ラウル・マデロを初めとする中産階級出身のジェネラルは挙って反対した。ビヤはそれらの支持を必要としていた。一方では、一度内戦が始まると、オブレゴンはオロスコやウエルタよりはもっと強力な敵になり、流血は免れなかつ

た。ピヤは中庸主義者を押し切って処刑を決断した。<sup>10</sup>

自分が直接関わったことを隠すため、チワワで処刑をしないことにしたピヤは、途中で特別列車を止めてオブレゴンを射殺するようジェネラル・マテオ・アルマンザを配置した。アルマンザはオブレゴンの乗った列車の通過に気付かなかった。これを知ったピヤは二度にわたって暗殺を企てたが、オブレゴンに説得され寝返った二人のジェネラル・エウヘニオ・アギレ・ベナビデスとホセ・イサベル・ロブレスのため目的を果たせなかった。オブレゴンの列車はカランサ軍が駐屯するアグアスカリエンテスに到着した。オブレゴンはソノラ奪回工作には失敗したが、ピヤのジェネラルを分断することに成功した。これに勇気付けられたオブレゴンはピヤとカランサを同時に失脚させ、メキシコに平和を取り戻し、自らが最高位に就くことに期待を持つようになった。<sup>11</sup>

多くのメキシコ人は新たな内戦に反対であったため、何れの側も相手を攻撃する気はなかった。ピヤは反カランサ色を鮮明にしたが、彼の部下は盲従しなかった。カランサ軍の方はそれ以上に新たな内戦には反対していた。カランサ派のジェネラル・ルシオ・ブランコと四十九人のジェネラルが北部師団との意見の相違を平和的に解決するために平和委員会を結成し、カランサはこれを渋々了承した。オブレゴンもこれに加わった。この革命評議会はピヤとジェネラルたちに手紙を書き、革命軍の分裂は未だ勝利していない革命の失敗に繋がるとして、両者の間の意見の食い違いを平和裏に解決することを申し入れた。その僅か数日後、ピヤと彼のジェネラルは平和的解決方法を提示した手紙を評議会とカランサに送った。彼らが示唆した内容は、もしカランサが退いて、リベラルな政治家であるフェルナンド・イグレシアス・カルデロンに譲れば問題は一挙に解決するとした。カランサはジェネラルにはそのような権限はないとして、たちどころに反対した。<sup>12</sup>

オブレゴンを含む評議会のメンバー多数がサカテカスに行き、ピヤのジェネラルと交渉した結果、両者にとり中立な場所であるアグアスカリエンテスでメキシコの将来を模索するための会議を開催することで合意した。出席者は軍事指導者あるいは軍事指導者を代表する民間人であった。其々が出席者数を決定することにした。

最高司令官カランサはこの提案に敢えて反対を表明しなかった。それに対抗したカランサは民間の政府関係者と革命評議会のコンヴェンションを10月1日にメキシコ市で開催すると宣言した。評議会は飽く迄もアグアスカリエンテスでの決定に従うとしながらも、カランサの会議に参加を表明した。カランサが任命した全ての知事、民間のアドヴァイザーは一致してカランサを支持した。会議が進行するうちに評議会のメンバーとの意見の食い違いが鮮明になった。

10月3日、カランサは辞表を提出した。当然皆が受け入れるとは思っていなかった。民間人たちは皆無条件で反対した。評議会にとっても今辞められるのはタイミングが悪かった。彼らはアグアスカリエンテスでカランサの辞任を切り札にしたかった。こうしてカランサの辞表は拒否された。会議は10月5日に終了し、軍人はアグアスカリエンテスへ

向かった。カランサのアドバイザー、ルイス・カブレラは参加を希望したが、断られた。

13

1. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P354
2. Ibid. P357
3. Ibid. P358
4. Ibid. P360
5. Ibid. P361
6. Ibid. P364
7. Ibid. P367
8. Ibid. P368
9. Ibid. P369
10. Ibid. P371
11. Ibid. P372
12. Ibid. P373
13. Ibid. P374